

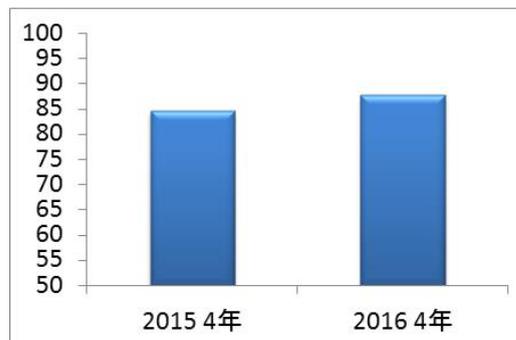
<p>研究代表者</p>	<p>所属学系・職名 外国語・外国文化学系・教授 氏 名 佐久間 康之</p>						
<p>研究課題</p>	<p>小中接続における英語熟達度の発達に関する横断的・縦断的研究 A Cross-sequential Study on Development of English Proficiency Through Cooperation Between Elementary and Junior High School</p>						
<p>成果の概要</p>	<p>【本研究の目的と成果の概要】 本研究の目的は、小学校外国語活動の効果を解明するため、認知発達段階の異なる小学生及び中学生の英語能力の変遷を多角的視点から検討することである。本研究は 2014 年度及び 2015 年度の研究の継続であり、引き続き小学生及び中学生を対象とした基礎的データの収集と分析を行った。</p> <p>【調査の実施内容】 小学校外国語活動の現状を把握することを目的として、福島県内 A 小学校の中学年以上と、福島県内 B 中学校の全学年を対象とした調査を行った。 まず、昨年度から継続的にデータ収集として、小学校の児童を対象に小学校外国語活動が児童の情意面及び英語リスニング力に与える影響に関わるアンケート調査（5 件法）及び英検 Jr（中学年は BRONZE、高学年は SILVER）を実施した。また、小学校と中学校の接続の観点から、小学校と中学校の児童及び生徒の言語処理の自動化の側面を横断的に調査するべく、日本語と英語の逆ストループテスト及びストループテストを A 小学校の児童と B 中学校の生徒に対して実施した。また、今年度からのデータ収集として、小学校外国語活動の目的である音声への慣れ親しみを測定する目的で、同小学校と中学校の一部児童・生徒を対象として CNRep（Children's test of Nonword Repetition）を実施した。A 小学校の現状として、半数以上の児童が学校以外で英語を学習しているため、主に学校のみでの英語学習歴である児童（以下、半年未満の学習者）の小学生と学校以外での 2 年間以上の英語学習歴を持つ児童（以下、2 年以上の学習者）の小学生に分けて比較分析を行うこととした。</p> <p>【成果の概要（一部のみ掲載）】 収集したデータの一部については分析途中である。そこで、本稿では本研究の中で最も基礎的なデータとなる英検 Jr（BRONZE と SILVER）について報告する。2015 年度の課題として、全ての学年において BRONZE を受験させたところ、高学年においては天井効果が見られていた。そこで、今年度からは高学年に対して SILVER を受験させることとした。したがって、中学年においては昨年度収集したデータと今年度収集したデータ（BRONZE）の比較を行ったが、高学年においては今年度収集したデータ（SILVER）のみを報告することとする。</p> <p>1. 3 年生のデータ 3 年生のデータについては前年度もデータ収集を行っているため、年度間で比較を行うこととした。平均得点率は右図の通りであり、2015 年度 3 年生は 76.28（標準偏差 14.11）、2016 年度 3 年生は 83.48（標準偏差 12.90）であった。従って、平均点や標準偏差に顕著な違いが</p> <div data-bbox="890 1720 1412 2063" data-label="Figure"> <table border="1"> <caption>3 年生の平均得点率</caption> <thead> <tr> <th>年度</th> <th>平均得点率</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>2015 3年</td> <td>76.28</td> </tr> <tr> <td>2016 3年</td> <td>83.48</td> </tr> </tbody> </table> </div>	年度	平均得点率	2015 3年	76.28	2016 3年	83.48
年度	平均得点率						
2015 3年	76.28						
2016 3年	83.48						

成果の概要

見られたと言える。しかし、2015年度と2016年度で外国語活動の時数の違いはなく、どちらの年度においても標準偏差が大きいことを考慮すると、学校外での英語学習の影響が強く反映されていると解釈する方が妥当であろう。特に、小学校英語教科化の方向性が具体的に示されたことで、学校外での英語学習が促進された可能性もある。今後の分析でも、当初の計画通り、学校外での英語学習の有無によって協力者を分けて分析することが必要であろう。

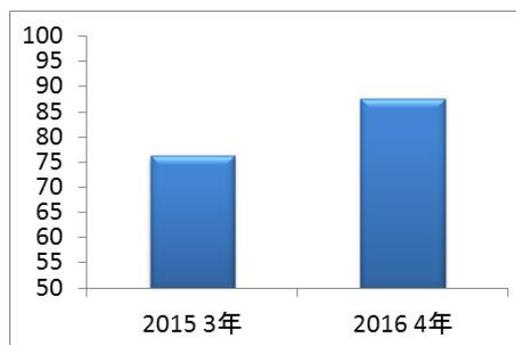
2. 4年生のデータ

4年生のデータについては前年度もデータ収集を行っているため、年度間で比較を行うこととした。平均得点率は右図の通りであり、2015年度4年生は84.58（標準偏差10.34）、2016年度4年生は87.68（標準偏差11.00）であった。従って、平均点や標準偏差に年度間でほとんど違いはなかった。



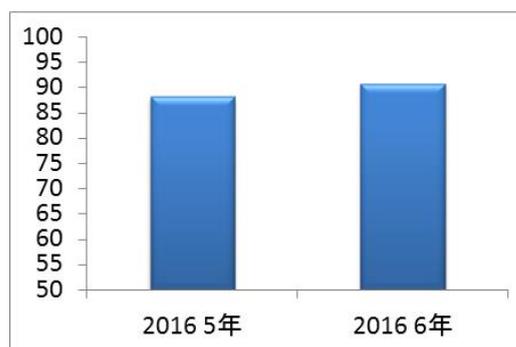
3. 2015年度3年生と2016年度4年生のデータ

2015年度3年生と2016年度4年生を比較することで、同一児童の1年間の変容を検討した。2015年度3年生と2016年度の4年生では平均点で11.40点の差があった。年間10時間程度であっても、英語の音声への慣れ親しみの向上に貢献した可能性がある。その一方で、2015年度と2016年度の3年生に見られた平均値差と同様に、学校外での英語学習が促進されたことに起因する可能性もある。



4. 5年生と6年生のデータ

今年度から収集した5・6年生のSILVERの平均得点率は右図の通りである。5年生は88.10（標準偏差6.04）、6年生は90.72（標準偏差6.98）であり、平均点に顕著な違いは見られなかった。今年度から実施したSILVERにおいても天井効果が見られている。



【今後の課題】

本研究は外国語活動の効果について長期的な視野で検討を行う点において意義がある。英語教育分野においては横断的な研究が多く、新しい英語教育制度を中長期的に見据えた本研究は当該分野における最先端の研究として学術的な価値も高い。次期学習指導要領も告示され、2020年度から小学校英語教科化が完全実施されることを踏まえ、現在の小学校外国語活動における学習者の現状とその影響（外国語活動経験者の中学生の現状）について多角的なデータを継続的に収集する必要がある。